様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　３月３１日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５２０２２２
研究課題名（和文）　ドイツ啓蒙主義文学のシステム理論的研究

研究課題名（英文）　A System-theoretical Study of the Literature of the German Enlightenment

研究代表者
津田　保夫（TSUDA YASUO）
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：20236897

研究成果の概要（和文）：ドイツ啓蒙主義は理性と感情の解放によって、それまでの心的システムと社会システムの安定性を動揺させたが、文学はそのような理性や感情を制御して、システムを再び安定化させる機能を果たしていた。その中で文学はシステムとして、「自律的主体の理性的自己解放」という啓蒙のプロジェクトを推進していたが、その実際の効果は限定的でしかなかった。その原因としては、システムとしての文学がもつ作者と読者との間のコミュニケーションの偶然性の作用が大きかったことが考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this study I researched the literature of the German enlightenment from the perspective of system theory and project theory. The German enlightenment disturbed the stability of psychic system and social system through the liberation of reason and emotion. The literature controlled the deliberated reason and emotion and worked as a stabilizer of the systems. In this way the literature promoted the enlightenment project as a system, but its real effect was restrictive. The main reason for it was probably the contingency in the communication between authors and readers

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ２００７年度 | 1,200,000 | 360,000 | 1,560,000 |
| ２００８年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| ２００９年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 3,400,000 | 1,020,000 | 4,420,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：システム理論・ドイツ文化史・ドイツ文学史・メディア史・啓蒙主義

## １．研究開始当初の背景

「文学は人間や社会にとって何の役に立つのか」という素朴な問題意識を出発点として、とくにシラーを中心に 18 世紀ドイツ文学を研究していくうちに、「自律的主体の理性的自己解放」という啓蒙主義の理念が当時の様々な分野において、様々な形で表れていることがわかってきた。その一方で、啓蒙の誤用によって生じる「啓蒙の弁証法」のネガティブな側面もまた存在しており、それをいか

にして回避するかという議論も行われていた。このような啓蒙主義の理念は、ハーバーマスのいう意味での「プロジェクト」として当時の文学の中でも作用しており、そのメカニズムは文学をシステムとして捉えることによって解明できるのではないかと思うようになった。

いわゆる（社会）システム理論はパーソンズとルーマンによって確立されたものであり、その理論を文学研究に応用しようとする試みは、すでに 1970 年代の終わり頃からフォスカンプやフォールマンらによって行われていたが、そこでは文学の制度的側面やシステムとしての機能的自律性が重視され、その一方でその内容的要素や全体との関連性は見失われていった。そこで、ルーマンとは対立的立場にあったハーバーマスの「プロジェクト」という考え方を補完的に取り入れて、その観点から全体の相互関係を捉えなおすことによって、文学システム内外のシステムとしてのそれぞれ独立した作用が複雑に絡み合いながらも、全体として啓蒙のプロジェクトを推進する機能を果たしていた有機的連関が浮かび上がってくるのではないかと考えたのである。

２．研究の目的

本研究の目的は、18 世紀ドイツの啓蒙主義期の文学を、一つの「部分システム」として捉え、それが当時の社会的文化的システム全体の中で、また他の部分システムとの関連で、どのような機能を果たしていたのかを、「システム理論」的観点から明らかにすることである。そのためには、文学システム内部における諸要素（作家、作品、読者、批評、出版、劇場など）の個別的作用と各要素相互の関連、また文学システムと他の文化的部分システム（宗教、学問など）および社会システム全般との相互関係を、詳細に検討する必要がある。そこでとくに論証したいのは、当時の文学が「自律的主体の理性的自己解放」という「啓蒙のプロジェクト」の推進機能を、一つのシステムとして果たそうとしていたのではないかという仮説である。具体的には以下の三つの点を明らかにしようと試みる。

(1) 文学システム内部の諸要素

ドイツ啓蒙主義期の文学システム内部の様々な要素について、それらが人間や社会に対してどのような機能を果たしていたかを解明する。考察の対象となる要素は、作家およびその作品、出版および流通の状況、読者層およびその受容、批評家およびその批評、文芸理論家およびその文芸理論、劇場などの施設および劇作品の上演状況、俳優たちの演技、観客の反応などである。

(2) 文学システム外部の諸要素

ドイツ啓蒙主義文学において、文学システムの諸要素と外部の他のシステムの諸要素とは、相互にどんな影響を及ぼしていたかを解明する。考察対象となる外部的要素は、宗教や教会、敬虔主義や理神論、学問や大学、医学や心理学、人間学、またライプニッツやヴォルフの合理主義哲学、スコットランド啓蒙主義のコモンセンス理論、メンデルスゾーンやカントの哲学、さらには政府の文化政策などである。

(3) システム全体における機能作用

そのような様々な要素のシステム内外での相互関連において、「自律的主体の理性的自己解放」という啓蒙のプロジェクトの推進機能が実際に作用していたのかどうか、そうだとすればどのように作用していたのか、また啓蒙の誤用による道徳的退廃や無秩序のような「啓蒙の弁証法」のネガティブな側面にどのような対処機能が作用していたのか、といった問題を考察することによって、システム全体における啓蒙のプロジェクトの推進機能の作用メカニズムを解明する。

３．研究の方法

(1) 文学理論および文学作品の考察

ドイツ啓蒙主義文学には様々なジャンルがあり、それぞれに文学理論や実作があるので、それらの相互関係および機能を考察する。文学理論ではブランケンブルクの『小説試論』、それに対応する文学作品としてはヴィーラントの『アガトン』などがある。ブランケンブルクは人間の内面史の記述を長編小説の中心に据えており、そこでは人間の内面観察や内省、心理分析などが小説の機能として要請されており、関連する文学作品でその機能の作用を分析する。

(2) 文芸雑誌および道徳週刊誌の考察

18 世紀ドイツでは数多くの文学雑誌や道徳週刊誌が創刊された。シラーの『ホーレン』などは高貴な芸術の育成と読者の心情の高貴化を創刊の目的としていたことで有名であるが、その他の多数の文学雑誌も、そのような啓蒙的な機能を多少なりとも果たそうとしていたのではないかと考えられる。当時の他の文学雑誌についても、その創刊目的や実際の掲載作品の内容、また流通状況や読者層などについて調査する。道徳週刊誌は読者の道徳的教化を目的としており、読者の道徳心に訴えかけるような実話や教訓話が多数掲載されていた。それらの作品を具体的に分析し、その機能について考察する。

(3) 文芸批評の考察

文芸批評は当時は盛んに行われており、ニコライの『一般ドイツ文庫』など書評雑誌も存在した。これらの書評や批評を分析することによって、当時の文学作品の受容状況や評価にあたっての価値基準の形成が明らかになるであろう。そしてそこにはやはり、啓蒙の

プロジェクトに合致するような規範があったのではないかと推測されるのである。

(4) 演劇と劇場の考察

演劇は 18 世紀ドイツにおいて最も重要な文学ジャンルであり、演劇理論ではゴットシェートやレッシングやシラーをはじめとして多数存在し、劇作品もザクセン類型喜劇からシュトゥルム・ウント・ドラング、ゲーテやシラーの古典主義的演劇など様々な種類がある。まずはそれらの理論と実作ついての分析が必要となる。次に、実際の上演に際しての演出や俳優の演技、舞台装置などの調査を行う。

(5) 宗教や教会との関連の考察

18 世紀ドイツでは宗教にも新しい潮流が現れてきた。理神論や物理神学は神や宗教を新しい世界観に適合するように理性的に捉えたものであり、啓示宗教に対する理性宗教や宗教的寛容の考え方も起こってきた。その文学への影響としては、レッシングの『賢人ナータン』などがある。その一方で敬虔主義の潮流も起こり、そこからは自己内省を中心とする自伝的文学も生じてきた。それはまた、感情を重視する感傷主義の文学とも深い関係がある。このような宗教と文学との関連について幅広く考察する。

(6) 学問や大学との関連の考察

学問の分野では、とくにニュートン力学やそれに基づく天文学および宇宙理論、またそこからさらに機械論的世界観が起こってきた。医学や生理学の分野ではラ・メトリの『人間機械論』に代表されるようなフランス唯物論思想が伝わり、ドイツではそれに対する大きな反発も起こった。その一方で、詩人でもある医学者ハラーは神経の機能に重点をおく医学理論を発展させ、プラトナーらは人間を身体と精神の相互作用する総体として考察する人間学を確立しようとした。またモーリッツは経験心理学雑誌を刊行し、そこに掲載した自伝的小説『アントン・ライザー』によって、心理学小説という新しい小説ジャンルを提示した。こうした新しい学問が当時の文学に与えた影響について検討する。

(7) 哲学や思想との関連の考察

哲学や思想の分野では、18 世紀半ば頃まではとくにヴォルフ哲学が隆盛を極めており、ゴットシェートの文学理論はヴォルフ哲学にかなりの部分を依拠している。中盤にはシャフツベリーやファーガソンなどのスコットランド啓蒙思想、とくにモラルセンス論が入ってきた。また後半に入ると、メンデルスゾーンらを中心とする水曜会が活動を行い、その機関誌である『ベルリン月報』では啓蒙主義の様々な問題が取り上げられた。このように、哲学や思想は文学とも密接に関連しており、その諸相を詳しく調査する。

(8) 政府の政策との関連の考察

プロイセンでは啓蒙君主フリードリヒ２世統治下に啓蒙主義運動が大いに推進されたが、王の死後にヴェルナーの反動が起こると、啓蒙主義は抑圧されるようになった。また他の地域でも、反啓蒙主義的な動きは起こっている。たとえば、シューバルトや若きシラーは領主のカール・オイゲン公から、その文学創作活動に関して干渉され抑圧された。こうした事例は他にも数多く見いだされる。このような政府による政策は思想的運動にも影響を及ぼし、文学にも大きく関連してくることになるのであり、こうした政治的情勢と文学との関連についても考察対象としなければならない。

４．研究成果

(1) 文学システム内部の諸要素の機能

文学システム内部の諸要素に関しては、とくにシラーを中心に、その理論的側面と実践的活動を考察した。

啓蒙主義は人間の理性のみならず感情をも解放しようとしたが、それによって人間の心的システムと社会システムを動揺させた。感情の解放は一方では熱狂やメランコリーといった極端な病的心理状態を引き起こし、理性の解放は無神論や唯物論をもたらして、それは道徳的退廃や反社会的な行動へとつながっていった。当時の文学はそのような状況を反映するとともに、道徳的感情を育成する機能をも担っていたのである。

とくにシラーは、初期の演劇『群盗』において、逸脱した感情とその帰結としての反社会的な破壊的行動を描き出した。また小説『哲学的書簡』では理性の使用から懐疑癖に陥り、それまでの素朴な信仰体系が崩壊してメランコリーに陥った人間の状況を提示し、『名誉喪失による犯罪者』では社会的状況から生じた感情により引き起こされた反社会的行動を分析的に記述した。

その一方でシラーは、不安定化した社会システムを再び安定化させるためには、まず各個人の心的システムの安定化が必要だと考え、その役割を文学や芸術に求めたのである。初期の演劇論文『よき常設の演劇舞台はそもそもいかなる作用をなしうるか』では劇場を「道徳的機関」とみなすが、道徳性の前提として理性と感性が調和的に作動する「中間的状態」を演劇によって人間内部に創り出す構想が試みられた。

この構想はやがてカント美学の影響を受けて、『崇高論』や『美的教育書簡』において展開される。それはとくに、「素材衝動」と「形式衝動」およびそれらを媒介する「遊戯衝動」という三つの衝動のモデルによる心的システムの再構築である。理性の使用による懐疑癖や解放された感情の暴発によって不安定化した心的システムはこの新しいモ

デルにおいては遊戯衝動が安定化作用を果たすのだが、これを作動させるのが美的芸術に代表される「遊戯」なのであり、そこで得られる理想的な状態、すなわち情念の支配から解放された「明るい」(heiter) 状態が「美的状態」なのである。シラーはこのようにして個々人の心的システムを文学や芸術によって安定化させることで、社会システムをも安定化させられると考え、そこから理想的な「美的国家」を構想していった。

実作面においては、シラーはとくに後期の悲劇創作において、崇高による美的教育を実践し、崇高という感情の惹起を目的とした悲劇作品を次々と創作し、舞台で上演していった。その一方で彼は文芸雑誌を発刊し、自分の理想とする文学の普及にも努めた。この時期の文芸雑誌は、ハーバーマスが『公共性の構造転換』でも指摘しているように、いわゆる「文芸的公共性」の重要なメディアとなっていたのである。

文芸雑誌『ラインのタリーア』の創刊告知文でシラーは「いかなる王侯にも仕えない世界市民として書く」ことを宣言し、「人間の魂」をもつ普遍的な世界市民としての読者公衆に働きかけようとした。またその後に創刊した『ホーレン』は、政治的題材を排除した普遍的な美的教養のための総合的文芸雑誌を目指し、それまで分散していた読者公衆を結集させようとした。すなわち、「純粋に人間的で時代のあらゆる影響を超越しているすべてのものへの普遍的で高次な関心によって、人々の心を再び自由にし、政治的に分断された世界を真理と美の旗の下に再び統合させること」を理念として、「真の人間性を促進する」ために「美を真理の媒介者とし、美の真理によって、永続的な基盤と高次の品位を与える」ことを使命としたのである。

しかし、『タリーア』も『ホーレン』も短期間で廃刊となる。その原因は、シラーの高い理想と現実の読者公衆とのあまりに大きな落差に原因があったように思われる。彼の求める美的公共性は、現実には大勢の一般大衆ではなく、選ばれた少数のサークルの中でのみ実現可能なものだったのである。

(2) 文学システム外部の諸要素との関連

文学システム外部の諸要素に関しては、とくに哲学と思想および宗教における啓蒙のプロジェクトの機能を中心に考察した。

ドイツ啓蒙主義はライプニッツやヴォルフらの初期啓蒙主義の合理主義的哲学の流れを継承しながらも、一方ではシャフツベリーやファーガソンなどスコットランド啓蒙主義から感情倫理や共感の思想を受け入れ、他方ではラ・メトリやドルバックなどのフランス唯物論に対抗しつつ、シュパルディングやモーゼス・メンデルスゾーンらが理性宗教的な神学的思想の上に人間学的な要素を多分に組み入れた啓蒙主義思想を形成した。そこからヘルダーの人間性（フマニテート）の理想やカントの理性法則に基づく道徳的自律の思想などにより、「自律的主体の理性的自己解放」という啓蒙のプロジェクトが展開していった。それはまた当時の文学システムに対しても影響を与え、観客への道徳的作用を目的としたレッシングの演劇論やその悲劇の実作、道徳的感情を重視したゲラートなどの感傷主義的小説、さらにはシラーの美的教育や崇高論およびその悲劇実作などに至るまで、啓蒙のプロジェクトは浸透していることが認められる。

その一方で、『ベルリン月報』における「啓蒙とは何か」をめぐる議論などでは、啓蒙の誤用による道徳的退廃が問題視されていた。啓蒙のプロジェクトとしての理性の解放は自律的主体を前提とするが、この自律的主体の確立はさまざまな困難を伴っていた。それまで神や王侯や父権主義などによって他律的なシステムとして安定していた社会および個人は、自律した主体のシステムへと急速に転換しようとしたため、さまざまな歪みが生じたのである。それは個人においては熱狂やメランコリーなどの異常な情念となり、社会においては反社会的で破壊的な行動となった。こうした啓蒙の弁証法の問題性は文学作品においても、たとえばシラーの『群盗』から『ドン・カルロス』を経て『ヴィルヘルム・テル』に至るまで、一貫して見ることができるのである。

このような文学の傾向には、学問の分野からはとくに、経験心理学が大きな影響を与えた。カール・フィリップ・モーリッツが創刊した『経験心理学雑誌』は、心的システムが不安定化したことによって生じる様々な人間心理の病的状態を分析記述したが、それはブランケンブルクの『小説試論』を理論的基盤として、「心理学小説」という新たな文学ジャンルを生み出した。これは人間の心的システムの観察と記述によって、システム自体の安定化を図りながら、啓蒙のプロジェクトを推進しようとする役割を果たしたのではないかとも考えられる。

しかし、政治の分野においては、ヴェルナーの反動などにより啓蒙主義運動は抑圧され、フランス革命のような大きな政治的変革は起こらなかった。文学は哲学や宗教、思想、学問など様々な他分野からの影響を受けながら、啓蒙のプロジェクトをシステムとして推進する機能を果たしてはいたが、その現実的な効果はやはり限定的だったと言わざるをえないのである。

(3) システム全体における機能作用

文学が社会システムのひとつの部分シス

テムであるとすれば、その構成要素はコミュニケーションであり、作品などを通して作者と受容者（読者や観客など）とのコミュニケーションが成立することによって、システムは存続する。ハーバーマスにおいてもルーマンにおいても、文学はコミュニケーションの一形式として把握されうるが、両者においてその理解の仕方には明らかな相違がある。

ルーマンにとってコミュニケーションは他のコミュニケーションへと接続することによって自己組織化を繰り返し発展していくものであるのに対し、ハーバーマスにとっては討議による合意へと至る過程と見なされる。ハーバーマスはとくに 18 世紀ヨーロッパにおいて文学がそのような機能を担っていたことを指摘し、それを「文芸的公共性」と呼んだ。

シラーの文芸雑誌も文学による公共性を目指したものであったが、その文学的コミュニケーションの主要な要因をなしていたのはハーバーマスのいう討議ではなく、むしろ美的共感であった。その意味で、シラーが文芸雑誌によって形成しようとした公共性は「美的公共性」とでも呼ばれるべきものであろう。シラーは文芸雑誌による美的公共性の形成というプロジェクトを試みたわけだが、それは当時の文芸雑誌という文学システムにおいては十分に機能できず、システムそのものを変えることもできなかった。そのため、晩年のシラーは演劇あるいは劇場という別の文学システムにおいて、そのプロジェクトを継続しようとしたのであり、それは同時に「自律的主体の理性的自己解放」という啓蒙のプロジェクトの文学システム内における推進でもあったのである。

この文学的プロジェクトが当時の文学システムおよび社会システムの中で、きわめて限定的にしか効果を発揮しなかった原因は、システム内にある偶然性による部分が大きいであろう。作品を介しての作者と受容者、あるいは受容者同士のコミュニケーションは、システム内では「(二重の) 偶然性」によって成立するしかない。そのため、十分な合意形成には至らなかったのではないかと考えられるのである。

(4) 得られた成果の位置づけと今後の展望

このようにして、ドイツ啓蒙主義文学をシステム理論的に、啓蒙のプロジェクトの推進機能という観点から考察することによって、文学がシステムとしてもつ様々な問題点を浮かび上がらせることができたと思う。

文学コミュニケーションはシステムとして（二重の）偶然性に左右されざるをえないが、その一方でプロジェクトを推進させるには一定の合意形成へと向かう必要がある。そのような合意形成の場として、文学は一定の公共性をもたなければならないであろう。

19 世紀に入ると人々の識字率は向上し、出版やジャーナリズムも発達していった。しかしその過程で「「文芸的公共性に代わって文化消費という擬似公共的もしくは疑似私的な生活圏が出現する」とハーバーマスは『公共性の構造転換』で指摘している。

文芸はマスメディアや出版産業によって高度に商業化され、大衆は文芸を商品として私的に消費するだけの存在となり、その公共的機能はますます失われる方向へと進んでいき、現代の消費社会へと至っている。現代社会において文学は、多くの純文学のように私的な世界に内閉する方向と、大衆に迎合して大量消費される方向とに、二極化しているように思われる。

このような状況の中で、文学はどのようにして公共性を取り戻すのか、また文学の公共性はどのようにして可能なのか。本研究はこのような文学の公共性の問題へと接続していくことになるだろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①津田保夫、「シラーの＜明るい＞芸術の理論 －″heiter″の意味を手がかりとして」、『独文学報』（大阪大学ドイツ文学会）、査読有、第 24 号、2008、pp. 129-144

②津田保夫、「文芸的公共性とシラーの文芸雑誌」、『言語文化研究』（大阪大学大学院言語文化研究科）、査読有、第 34 号、2008、pp. 41-60

〔学会発表〕（計１件）

①津田保夫、「シラーの頭蓋骨をめぐる真贋論争の顛末」、日本ヘルダー学会 2009 年度春季研究発表会、2009 年 6 月 14 日、立教大学

６．研究組織

(1)研究代表者

津田　保夫（TSUDA YASUO）

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授

研究者番号：20236897

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし